

提督に憑依して自身の体を持ち主に返そうと四苦八苦する話（の予定）

古いタイプのトイレの鍵を一円玉で開ける人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思い出した設定。昔書いたけど消したやつを再投稿。

目次

プロローグ	1
1話 手のひらドリル	4
2話 防波堤にて (川内 s i d e)	7
2話 防波堤にて	13

プロローグ

「……知らない天井だ」

定番のセリフとともに俺は目を覚ました。実際違う。記憶だと、ボロアパートの一室の寂れた天井のはずだ。こんなきれいな模様の入った天井ではないことは確か。なんだ、気でもくるって高級ホテル泊ったのか、昨日の俺。

起きて周りを見渡すと、なんか高級感あるシックな部屋だった（小並感）

更に視点が高く、布団ではなくベッドに寝ていたようで、普段より目覚めが良い。ホントなんだ。酔って記憶がないのか……いや酒を飲んだ記憶すらない。

とりあえずベッドから降り立つ。ベッドが久々すぎてちよつと手間取った。

何か情報は……ベッドの傍の机に置時計（それもアナログ）があった。時刻は4：44。……わーお、俺は死ぬらしい……不吉な考えを振り払いつつ、更なる情報を求め部屋を見渡す。時計だけじゃ分らんが、部屋の明かりはついていて、カーテンは閉め切つてあることから多分午前なんだろう。普段なら二度寝を決め込む時間帯だが、この非常事態に脳は覚め切っていた。

「……ひたひ」

頬をつねるが夢から覚めず、普通に痛かった。

それでもって探索続行。机の上には置時計以外なかった。ざつと見た感じ部屋の広さは12畳くらい？ 高級感溢れるタンスやクローゼット。難しそうな分厚い本が並べてある本棚に仕事用なのだろうか作業机。ホテルかと思いきや意外と生活感があつて、一瞬俺はこの住人なんじゃ……と勘違いしそうになった。もちろん違うが。

他にもカーテンで覆われた窓や、何処につながっているのか少し重そうなドアがあつた。とりあえずカーテンを開けて外を見る……も時間帯のせいかわつ暗で何も見えん。微妙に光は感じるが、目に映る限り光源は見当たらなかった。高さも不明。でもなんとなく高い気が

する。なんとなく。

部屋の外に出るのは怖いからスルーで。

それにしても、スマホやパソコンどころかデジタル機器が一切ないとは……このへやの住人はいったいどうやって生活しているのか。あ、タンスの上に置き鏡がある。角度的に俺の服が映っており、それも質の良さそうな寝間着（それも普段着ているスーツよりも高そうな）を着ていた。ふと鏡を手にとってみると顔が映って……うん。俺ってば超イケメン。やだかっこいい。いったい何人の女を抱いてきたのかしら……そろそろ逃避を止めよう。鏡には、昨日までの腑抜けた顔とは別人のイケメンが映っていた。びっくりしたろ？ これ、俺なんだぜ。信じられん。

……もろもろの状況から察するに俺はこの部屋の住人のようだ。

転生か憑依か知らんが、ライトノベルみたいな展開が俺の身には起こっているらしい。

金持ちでイケメンとか人生勝ち組じゃん！ ……と考えられたら気楽でいいのだが、あいにく俺はネガティブ志向なもんで、今後に不安しかなかった。

この体の名前すら分かっていないんだぞ？ 職業は？ 命に危険はないのか？ 経営者とか技術者だったらどうする？ そんな知識俺にない。人間関係は？ 家族、友人の存在すらわからない。

一つでもボロが出れば終わりだ。成りすましすら疑われるかもしれない。

「ちっ……神か何だか知らんが記憶くらい受け継いでもいいだろうが……」

時代もそうだ。デジタル機器が一つもないということは、まだ生まれてないのかもしれない。外が暗いのも街灯が無いからかもしれない。

不安要素が次々と浮かんでは俺を恐怖に陥れる。

神に愚痴るのも仕方ないくらいの雑な展開。

手掛かりを求め、部屋を荒らしまわる。自分の部屋なんだからいいだろ（暴論）

タンスには着替えやら薬やら生活用品が詰まっております、非常食なのか缶詰などの携行食品が入っていたが、カップ麺やカロメ（カロリメイト）はなかった。使えね。

クローゼットを開くと、仕事で着るのか、すんごく高そうな礼服が入っていた。白を基調として肩に黒いラインが3本、胸には階級を示しているのか金色の勲章がついていた。それが上下サンセット。うわまぶしい。

あとは…本棚はスルーで。

「…作業机か」

作業机らしき座り心地の良さそうな椅子付きテーブルの上で、俺は一冊の本を見つけた。

手に取ってみると…自作したものなのか、カバーがなく表は真っ白だったが、裏返すと中央に手書きでタイトルが書かれていた。

『艦娘名簿』

勝ったな

1話 手のひらドリル

さて、これを見ることでここが艦これ世界だと判明したわけだ。

艦これにイケメン提督（確信）として転生とかなにそれ人生勝ち組じゃん。神様ありがとう（手のひらクルー）

早速『艦娘名簿』の中身を読んでみる。

「霧雹鎮守府 着任艦娘

戦艦

▪ 大和

▪ 長門

▪ 金剛

▪ 榛名

正規空母

▪ 赤城

▪ 加賀

▪ 翔鶴

▪ 瑞鶴

軽空母

▪ 龍驤……

▪
そこには、見知らぬ鎮守府名と、見知った艦娘名がずらりと書き並んでいた。

……てか鎮守府名、なんて読むんだよ。振り仮名ふつとけよ。絶対初見じゃ読めんだろ。

……にしても、この鎮守府にはこれだけの艦娘が居るのか……やべえニヤつきが止まらない。ワクワクが収まんねえ。

「……あっ」

そこで俺はふと気づいた。

「……艦娘との接し方が分らん」

ヤバい、接し方が分らねえとボロが出て俺が偽物だとばれてしま
う。そうなると艦娘と触れ合えなくなる……

これは致命的な問題だ。解決すべく俺は一旦名簿を閉じ、何か参考
になるものはないかと机の上に視線を走らせる……紙束が綴じられ
た冊子を発見。

『戦鬪報告書』

……これだ、これで艦娘との接し方を……

……パタン

1行目で読むのを諦めた。

まああれだ……俺は活字に弱い。小説なんか絶対に読まないタイ
プだし、新聞とか説明書もダメなタイプである。読めるとしてもイラ
ストや写真付きで数ページが限界。

そんな俺が、『戦鬪報告書』を開いた瞬間ページを埋め尽くさんばか
りの文字列と出会い、反射的に冊子を閉じてしまったのは仕方ないと
思う。今更だが、ここがアナログ世界なのを思い出した……グラフや
写真なんて在るはずなかったんや……。

落胆しつつ一応他の冊子や、本棚なんかを漁ってみるが、活字のみ
が8割で、挿絵付きも1冊に数枚分程度で、本の内容なんか分る筈が
なかった。

活字の世界なんて……やっぱクソだわこの世界（手のひらドリル）
「……寝るか」

興が醒めた俺は、とりあえず現実逃避することにした。
目が覚めると元に戻ってますように……

☆☆☆

「夢じゃない……か」

起きても現実はず変わらず、時計を見れば8:34を示していた。

「はっ、7:94で“なくな”ってか？ ……下んねー」

しようもない考えを巡らせて気を紛らわせつつ、窓から光を感じて外を見る……と

「おお……」

——海が宝石のように光っていた

どうやら窓の向こうは海が広がっているらしい。道理で光源が一切なかったわけだ。そして、思わず感嘆の声を漏らしてしまうほど、朝日を受け輝く海は綺麗だった。見える角度的に、ここは2階くらいのようなのだ。

衝動的に窓を開けたくなくなったが、残念なことにこの部屋の窓は開閉式ではないようだった。

「……外、出るか」

ネガティブ志向な俺としては、まだ艦娘に会うことが怖いけど、この海を見ていると気が晴れる……というかもっと海を近くで見てもよかった。窓から見てもこんな綺麗なんだ。近くで見たらどれほどものか、興味がわいた。

「……どうせ、何れは出なきゃいけないだしな」

海の手前には堤防と防波堤が広がっており、見える範囲に人気はなかった。

そこに向かおうと思いつが……

「服装……どうしよ……」

……まあ私服っぽいやつでいいだろ。仕事に行くわけじゃないんだし。

………そういや提督^俺仕事って何だ？

2話 防波堤にて（川内 side）

——私は、提督が苦手だ。

「あつ……」

「ん？」

私が鎮守府の端にある防波堤に来たのは、ただの偶然だった。

夜戦演習から帰投した私達二水戦は、暫しの休息が与えられ、妹達はもう既にベッドで寝ている頃だと思う。でも私だけ、横になっても中々寝つけずにいて、こうして外を彷徨うように歩いていた。理由は簡単、今回の演習で私は失態を晒してしまったから。

最初は、些細で単純なミスでしかなかった。でも、私はそこから盛り返そうと焦ってしまい、前に出過ぎて被弾。それ以降も悪循環のように普段はしないような失敗が続いてしまっていた。

神通や那珂からは「気にしていない」と気を遣われたけど、もし今回が実戦だったら…と考えるとゾツとして眠れなかった。

☆☆☆

無意識の内に人気のない場所に向かっていったのか、気づけば私は人気がない防波堤の端を歩いていた。

眩しい朝日のせいか、それとも寝ぼけていたのか分からないけど、その時私は防波堤に先客が居るのに気づかなかった。

先に居たのは…何時もの軍服ではなく、私服の様な服を着た提督だった。

——この鎮守府の提督は、優秀な仕事人として有名ならしい。

でも、それはあくまで外から見た場合で、私達艦娘からはあまり好かれている訳ではなかった。

確かに仕事はできる人だと思う。艦隊の指揮は的確だし、咄嗟の事態にも即座に判断を下せるし、部下の艦娘の発言にも耳を傾け、取り入れてくれる：有能な提督なのは間違いない。

：だけど、艦娘との接し方が「艦娘は兵器」というスタンスを変えることはなかった。仕事以外で艦娘と会話するようなことは一切なく、顔を合わせることもすらない。

ふだんから執務室か私室に籠もっている人で、艦娘の方からアプローチしても応じることはまずなかった。

私も提督の私室に行ったことはあるけど、「用件は何だ。無いなら去れ」とドアも開けずに拒絶を言い放たれ、何も言えず撤退したことがある。

それに対外的に「艦娘は兵器だ」と明言していて、それが理由で提督を嫌う艦娘も多かった。

私も「兵器以上の価値はない」と言われている気がして嫌だった。

——だからだろう。執務室の軍服姿の提督以外見たことがなく、驚きで固まった私我更なる驚愕と困惑に包まれることになったのは。

私の声に提督が反応して振り向くと、一言呟いた。

「川内か」

「っ!？」

緊張で強張っていたため咄嗟に声が出ずに、思わず引きつった声を漏らしてしまう。

……提督から名前を呼ばれるなんて初めてなのでは?!

ふだん、提督が艦娘を名前で呼ぶことはなくて、あるとしたら艦隊指揮の書類上に書かれるくらい。呼び掛けるにしても「川内型1番艦」のように、名前で呼ばれたことはなかった。「名前を覚える気はない」と前に言っていたし、てっきり私も覚えられていないと思っていたけど……

「…何だ?違うのか」

「えっ!?!」

訝しむように提督に言われ、私は慌てて返事をする。

「い、いえ川内で合つて…ます。え、えつと…おはようございます?」

なんて言えば良いか分からず、ただの挨拶が何故か疑問形になってしまう。

と、急に提督が吹き出して、

「ぷっ…クク…何だそれ。いつも通りの口調で良いぞ」

「い、いつも通り?」

提督から「いつも通りの口調」と言われて困惑する。

そもそも、提督と話したことなんて数える程しかないし、いつも通りってことは…ふだんの、他の艦娘に対する口調?

私が考え込んでいると…提督はハツとしたように口を閉じ、俯いて無表情になって言った。

「あ…いや、何でもない。忘れてくれ」

「……」

それを聞き、私はさっきの会話がなかったことにされると感じ、それが何故か無性に嫌で、衝動的に口を開いた。

「け、敬語で話さないでいい…ってこと?」

「…ああ。そうしてくれると有り難い」

「なら、『いつも通りの口調』にするね」

「……助かる」

…どうやら、この思い切った行動は成功したっぽい。

内心、拒絶されるんじゃないかとヒヤヒヤしてたけど、提督は受け入れてくれ、ホッとしたように溜息を吐いた。

そのことに、私はどこか幸福を感じているような気がして…その原因を探ろうと、私は提督に話しかける。

「提督はさー、なんで防波堤に来たの?」

「…自室から見た海が綺麗だったもんで、間近で見たくなって碌な着替えもせず飛び出してきた」

「えー何それ。でも…確かに。キラキラしてて綺麗だね」

夜の海は好きだけど、こんな海も嫌いじゃない…。
そう思えるくらい、ふだん見ている海が、なぜか一層輝いているように感じた。

互いから目を海に向けて、しばらく無言の空間が広がる。でも、それは今までとは違い、それは居心地の良い沈黙だった。

ふと、今度は提督が訊ねてきた。

「そういや、川内の方はなんで防波堤に？」

「あ…、それは……」

「…言いたくないなら言わなくて良いけど」

「……ううん。やっぱり聞いてくれる？」

「あいよ」

……元々、この失敗は誰にも相談する気はなかった。

けれど、目の前の綺麗な海や、居心地の良さに背中を押されるようにして、私は提督に夜戦演習の出来事を話し始めた。

☆☆☆

私が話している間。提督は終始無言で、けれど真剣な顔で聞き込んでいた。

話し終わると、たった一言。

「そうか」

と言ったきり黙ったまま。

でも、それは真剣に考えてくれるのが判って、安易な慰めの言葉が言われるよりは、よほど嬉しかった。

「……逆に考えるべきなんじゃないか？」

「逆？」

考えが纏まったのか、提督が話し始める。

「そ、『実戦だと思おうとゾツとした』じゃなくて、『演習だから何も無かった』って」

「でも、それだと…」

「改善しないって？だから、加えてこう考えるんだよ『実戦前に判つて良かった』ってさ。」

実戦前に気付けたんだ。なら今から改善したら実戦までには間に合うだろう？それに、恐らくだけど川内はミスに慣れていないんだ。なら敢えてミスを犯して、立て直す練習もありなんじゃないか？」

「……………」

…たぶん、ここで提督に相談せずとも、この失敗からは自力で立ち直れたと思う。

でも…それでも、提督の真剣な表情を見つめていると…私は、ある感情を自覚してしまいそうになるのを感じた。

もう既に、失敗したことなんてどうでも良くなっていた。

☆☆☆

「ありがとね、提督っ！相談に乗ってくれて」

「元気が出たようで何より」

あの後も会話を続けていると、気付いたらもう昼近くになっていた。

…もつと居たいけど、もう妹たちが起きてるだろうし、提督も忙しい筈…。これ以上迷惑をかけたくないし、私は部屋に戻ることにした。

確定じゃないけど、また会う約束も既になっている。

「うん。それじゃ、ちよつと夜戦に行ってくる」

「その前にちゃんと寝ろよ？昨日からまだ寝てないんだろ」

「はーい。提督、またねっ！」

「また後で」

また提督と会話できる。

その事実が純粹に嬉しくて、それは今までとは逆の感情なことに気づいて苦笑いしてしまう。

「どうした？」

「ううん、何でもない。…さっきの件、よろしくね！」

「あいよ、任された」

「それじゃ！」

部屋に戻る足取りは軽く、こんなにも夜が楽しみなのは久しぶりだった。

2話 防波堤にて

部屋から出た！ 外は廊下だった！ 廊下を歩いた！ 階段に着いた！

……いやさ……勢い付いたら、恐怖心克服出来るんじゃないかなって……え？ 出来なかったけど何か？

廊下は薄暗く、人氣が無い。階段は下りのみで、ここは建物の最上階のようだ。一応他に部屋はあるが、これも人の気配はない。提督専用のフロアなのか？

下に降りると、1階のようで、廊下の奥に入り口を発見。早速向かって歩き始める……と。

途中で、ドアから出ようとしていた赤毛の艦娘……明石とすれ違った。

をー初艦娘だー……と喜びたいのだが……明石は俺を視認すると、口を開けて固まってしまった。

……何なん？ 俺になんか付いてるん？ なんだよそのUMAを見た時のような表情はよ！ (被害妄想)

すれ違い様に顔を向けると、顔を真っ赤にして脱兎の如く来た部屋に戻ってしまった。その時、焦りすぎてスカートが捲れ、似合わない純白のパンツなんかを履いていたことには突っ込まないでおこう。(スゴイ シツレイ)

これはあれだな。俺のイケメソフェイスに惚れたんだな (妄想)

「あっ……」

「ん？」

防波堤の上で、突っ立って海をながめていると、ふと横から声が聞

こえた。

横を向くとオレンジ色を基調とした制服に髪をツインで短く纏め、夜戦バカの名で有名な少女がいた。リアル艦娘。間近で見ると更なる迫力。これはふつくしい。

あ、おねーさん10000円でどう？ 大丈夫大丈夫、天井のシミを数えてたら終わるかr（殴）

気を取り直して 閑話休題。思考がクズに染まる前に話しかけよう。

あれ？ ……実際に艦娘話しかけんのって初めて？
緊張するけど、とりあえずボロが出ないように……

「川内か」

「っ!？」

えっ!？ 何その反応!？ ミスった!？ どこで!？ (10ダメ+混乱)

内心大慌てで、でも表情は変えずに……(なんか意識したらできた。この体のスペックえ……)

……とりあえずこのまま行くか (脳筋ゴリ押し)

「……何だ？ 違うのか」

「えっ!？ い、いえ川内で合ってます。え、えつと……おはようございませう?」

「ぶっ……」

クク……画面上とは言え、ゲーム内のイメージと掛け離れた敬語に思わず笑いが……

「何だそれ。いつも通りの口調で良いぞ」

「い、いつも通り?」

………あ、そうじゃん「いつも通りの口調」ってゲームの話で、此処じゃないじゃん。何言ってだ俺 (ん抜き言葉)

困惑する川内に物凄い罪悪感が湧いて来た。すまぬ。

「あ……いや、何でもない。忘れてくれ」

「……」

すると、川内は考えるように黙り込んだ。

……これ入れ替わりバレたか？ いやそりやバレルよな。今頃成り済ましか記憶齟齬を疑われて――

「け、敬語で話さないでいい……ってこと？」

――ない？ あれ？ どゆこと？

……一瞬、何を言われたか分からなかったけど、俺は一種の可能性に気がついた。

「……ああ。そうしてくれると有り難い」

「なら、『いつも通りの口調』にするね」

「……助かる」

そうか……川内は『提督と話した事』がなかったんだな。だから、急に話し方を指示されて困っていた……と。

証拠に、困惑顔はされても、他人だと疑うような素振りは見せなかったし。

ほら今も……早速気易い笑顔を向けて話しかけてくる川内がいた。

「提督はさー、なんで防波堤に来たの？」

画面上リアル以外で、ゲームまのこえにないセリフを聞けるとは……女優の公開演技に来た気分……はふう……尊い。

思わず拝みたくなくなったが、鋼の意思で我慢し、内心で拝み倒しながら冷静に応える。（我慢できてない）

「……自室から見た海が綺麗だったもんで、間近で見たくなくて碌な着替えもせず飛び出してきた」

「えー何それ」

可笑しそうに笑う川内を、俺は犯しそうになる（笑えない冗談）

「でも……確かに。キラキラしてて綺麗だね」

……そいつは意外。夜の海以外興味ないのかと思ってた。

そう言いかけたが、「なんで知ってるの？」と疑われそうをやめた。それから暫く、川内は海に見惚れ、俺も海に（見惚れるフリをしつつ横目で川内に）見惚れる時間が続く。

……ふと、川内が防波堤に来た理由が気になった（おっつつつそ）

「そーいや、川内の方はなんで防波堤に？」

「あ……、それは……」

言い淀む川内に、『これは聞いちゃいけないパターン』だと即座に理解する。

「……言いたくないなら言わなくて良いけど」

「……ううん。やっぱり聞いてくれる？」

いいんかい。(ツッコミ)

「あいよ」

そう返事すると、川内は昨日のとある出来事を話し始めた。

——なんか真面目なふいんき(変換できない)になってるので、ちよつと空気変えます(唐突)

☆☆☆

「……そうか」

なるなる。川内の話を纏めると……

詰まるところ、川内ちゃんは、昨日の夜戦演習で小さなミスをしてしまい、それから挽回しようとして更にミスって、それからそれから……てな感じで負の連鎖に嵌ったと……

……え？ シリアス？ 俺の内面見て逃げ帰ったよ？ (勝利)

でも、そもこれは相談ってよりかは、ただ誰かに吐露したいだけだったんだと思う。

その証拠に、川内の話し方は何処か冗談を言う感じで、時折虚勢とはいえ自虐ネタをかましてきたし。

あ、あと俺自身、用語が分からんで話が5割程度しか理解できなかった。

そんな奴がどうアドバイスしろと？

なもんで、此処は黙って居るのが正解なんだ。

「……………」

川内は妹らを起こしに部屋に戻るらしい。

本人は一睡もしていないし、少し心配だが、今日は（夜まで）何も無いからその間に休むとのこと。

昼に寝て夜戦う……うん、安定の夜戦バカだな（確信）

「うん。それじゃ、ちよつと夜戦に行ってくる」

「その前にちゃんと寝ろよ？ 昨日からまだ寝てないんだろ」

「はい。提督、またねっ！」

「また後で」

川内は何か嬉しいことでもあったのか、笑みなんて浮かべている。

「どうした？」

「ううん、何でもない」

そんなに俺に会えたのが嬉しいのか……

……分かってるよ、そうじゃない事くらい。自虐ネタだよ笑つてくれ。（本当に笑った奴はぶっ飛ばす）

「さつきの件、よろしくね！」

「あいよ、任された」

そう……川内には頼み事、「今夜……夜戦しよう？（意味深ではない）」というお願いを受けた。

具体的には、「今夜また夜戦演習をしたい、ついでに提督も見に来て」と言われた。

あれか？ 「観客がいる方が燃える！」的なタイプなんか？ テニスかよ。

いや……ある意味砲弾の撃ち合いだからテニスのな……ないな
「それじゃー！」

俺が下らないことを考えてるうちに、川内は去っていった。

そろそろ部屋に……戻る意味なくね？ うん、ないな。夜戦も今からでなくとも大丈夫だろ……たぶん。

そうだな。なら次はどこ行こうか……そういや腹減ったな。起きてから何も食ってないしな……

普段はどうしてんだか……食堂でも探してみるか？

そんな事を考えながら、俺は行先も決めずに歩き出した。